委員会行政視察報告書

委員会名	観光建設常任委員会

活　動　委　員　名		
久慈　年和　委員長	笹渕　峰尚　副委員長	山田　洋子　委員
小笠原　良子　委員	江渡　信貴　委員	工藤　正廣　委員
小川　洋平　委員		

経　費　区　分				合計金額
1　研修旅費	2　自動車借上料	3　議長交際費	一人当りの費用	
809,691	―	7,632	116,760	817,323

期　間 (年月日)	令和５年　７月11日（火）　～　令和５年 7月13日（木）（ 2泊 3日）
視察事項	・北海道帯広市　「フードバレーとかちについて」
	・北海道北広島市　「観光における広域的な連携の推進について」
視察先	北海道帯広市、北海道北広島市

内容及び成果

別紙報告書のとおり

※視察報告書の充実を図るため、視察時の質疑応答事項等も記載してください。視察者個々の所感は別途作成し添付してください。

2023年 8月25日

観光経済常任委員会 先進地行政調査報告書

観光建設常任委員会
委員長　久慈 年和

1．調査年月日 令和５ 年 ７月１１日（火）～１３日（木）
2．目的地と調査項目
・目的地　７月１２日（水）　北海道帯広市議会
調査時間 9時３０分から11時00分
研修項目　(1) フードバレーとかちについて
・目的地　７月１３日（木）　北海道北広島市議会
調査時間 9時30分から11時00分
研修項目　(1) 観光における広域的な連携の推進について
3．日　程　別紙、観光建設常任委員会先進地行政調査研修日程を参照
4．参加者　観光経済常任委員会　委員長　久慈 年和
副委員長　笹渕 峰尚
委　員　小川 洋平　　委　員　工藤 正廣
委　員　江渡 信貴　　委　員　山田 洋子
委　員　小笠原 良子

5．調査報告書
＜北海道帯広市＞

フードバレーとかちについて

十勝地域の概要

十勝の開拓は、北海道に多く見られた官主導の屯田兵によるものではなく、晩成社をはじめ、本州からの民間の開拓移民により進められた。帯広市の本格的な開拓は、明治１６年（１８８３年）に、静岡県の晩成社の一行１３戸２７人が、下帯広村に入植した。しかし、度重なる冷害やバッタ、野ネズミの襲来など、苦闘の開拓生活が始まった。

道央圏では、至難とされた水稲栽培に成功し、北海道の寒冷稲作の基礎が築かれたが、十勝圏は、夏は３０度を超え、冬は－２０度を下回るなど寒暖の差が激しい地域で、稲作には不向きで、現在、根菜類を中心とした畑作と人口より多い乳牛や肉牛の飼育が盛んになっている。

帯広市は十勝平野のほぼ中央に位置し、十勝圏として１市１６町２村の自治体で構成し、第２期十勝定住自立圏共生ビジョンを策定し、帯広市の職員は、「十勝地域の職員」と意識し、オール十勝でまちづくりを行っている。

十勝地域は、総面積10,831㎢で、岐阜県とほぼ同じで、北海道全面積の１３％を占めている。

十勝の人口は327千人で、帯広市の人口は163千人で、人口減少が顕著な北海道で、十勝は最も人口減少が抑制された地区になっている。酪農をはじめとする農業が盛んで、後継者などの心配がないことも人口減少が抑制されている理由になっているようです。

十勝地方は、国内有数の日照量を有し、広大な土地と大雪山系や日高山系を源とする十勝川と札内

川からの豊富な水源に恵まれて、ハム会社など企業の立地も進んでいる。十勝の強みは、耕地面積が約２６万haで全国の５％強。乳牛と肉牛の飼育頭数は、約４３万頭で全国の１１％弱。食料自給率は約１，２４９％で年間、約432万人分。農協の取扱高は３，２３３億円になっており、馬鈴しょ、小麦、豆類、とうもろこし、長いも等は全国トップクラスの生産量になっている。

フードバレーとかちについて

＜十勝の農業＞

■ 2,500㎢の耕地

十勝全体の面積　10,800㎢

乳用牛と肉用牛　飼育頭数 45万9千頭（人口32万7千人）

■ 全国トップクラスの生産量

小麦　⇒　十勝　生産量　全国で約27%

馬鈴しょ　⇒　十勝　生産量　全国で約37%

てん菜　⇒　十勝　生産量　全国で約47%

小豆　⇒　十勝　生産量　全国で約60%

生乳　⇒　十勝　生産量　全国で約18%

肉用牛　⇒　十勝　生産量　全国で約10%

また、食料自給率は、1,170%（約400万人分の食を生産）

■ 十勝管内の農協取扱高

2010年　2,380億円　から2022年　3,494億円

十勝農業のポジション（農林水産省 2020年）

1位　北海道　12,667億円

2位　鹿児島　4,772億円

3位　茨　城　4,417億円

4位　千　葉　3,8537億円

十勝（JA取扱高）3,494億円

5位　熊　本　3,407億円

6位　宮　崎　3,348億円

7位　青　森　3,262億円

＜十勝の農業＞

■ フードバレーの由来

オランダ ⇒ フードバレー

アメリカ ⇒ シリコンバレー

「農業・食」の集積地を十勝に形成する

■ 「フードバレーとかち」の生みの親帯　　帯広市長 米沢 則寿

■ 「フードバレーとかち」のコンセプト

地域の強みである農業を成長させ、それを基盤とした新たな農協を創出し、十勝から世界

■ 「フードバレーとかち」のマネジメント

フードバレーとかち推進協議会

大学・試験研究機関　農林漁業団体　行政機関　金融機関　商工業団体

等41の産学団体が加入

■ フードバレーとかちの推進エンジン

・十勝定住自立圏　形成（2011年7月～）

十勝19市町村　十勝の「強み」を最大限に生かした連携

・北海道フード特区　国際戦略総合特区　指定（2011年12月～2022年3月）
・十勝バイオマス産業都市　認定（2013年6月）
　十勝バイオマス産業都市構想
　　バイオガスプラント事業の稼働件数
　　51基（十勝管内）　255基（全国）
　　バイオマス産業都市の投資誘発
　　5約216億円（2013年～2021年累計）
・十勝・イノベーション・エコシステム推進事業（2016年8月～）

＜行政調査の感想＞

十勝地方は、国内有数の日照量を有し、広大な土地と大雪山系や日高山系を源とする十勝川と札内川からの豊富な水源に恵まれて、水田は酒米（十勝晴れ）以外はほとんどなく、畜産を中心とした農業が盛んな地域だ。そのため、家畜排せつ物の処理という大きな課題があった。悪臭が激しく地域住民にとって住みづらい環境になっており、悪臭の克服のため、自治体を中心に家畜排せつ物のバイオマス事業に取り組んできた。現在は、どの地区でも悪臭はほとんど解消されている。

また、農畜産業も土地や農業機械などの規模が大きく、さらに農畜産業の拡大も進んでいる。

十和田市は米、ごぼう、長ネギ、にんにく、長いもが主力の農業で、肉用牛も盛んだが十勝の大規模化や牛の数も及ばない。（十勝は、乳牛が肉牛より多く飼育されているが、十和田市の畜産は、肉牛が圧倒的に多く飼育されている。）

北海道では、人口減少率は、十勝圏域が札幌圏域に次ぐ低さで、農畜産業などの後継者が多くいることを証明しており、十勝に住もうと思っている若者がいることをうらやましく感じた。

5．調査報告書

＜北海道北広島市＞

観光における広域的な連携の推進について

北海道北広島市は、明治１７年（１８８４年）、広島県から２５戸が東部地区の中の沢（現在の中央付近）に一村形成を目指して団体移住した。道央では、至難とされた水稲栽培に成功し、北海道の寒冷稲作の基礎を築いた。また、明治１０年（１８７７年）に札幌農学校の教頭クラーク博士が帰国する途中、見送ってきた学生たちと別れるとき「青年よ大志をいだけ」という名言を北広島の島松の地で残した。昭和４４年（１９６８年）に町制を施行、平成４年（１９９２年）には5万人を突破。平成8年（１９９６年）9月1日に「北広島市」がスタートした。

石狩平野のほぼ中央に位置し、北西に札幌市、北に江別市、東には長沼町と南幌町、南には恵庭市があり、ＪＲ北広島駅は、札幌と新千歳空港駅のほぼ中央に位置し、快速電車で札幌市まで１６分で到着し、新千歳空港駅まで約２０分で到着する。

（東京・羽田空港から1時間50分、関西空港から2時間10分）

人口は、年々増え、平成１７年に６０，６７７人まで達したが、その後の人口は微減し、現在、５８，１４７人となっている。

説明者　北広島市の概要紹介　⇒　北広島市議会　　副議長　坂本 覚
　　観光における広域的な連県の推進について
　　⇒　北広島市観光推進課　　課長　橋本 征紀

北広島市の「観光における広域的な連携の推進」の取り組みの概要は、

・北海道ゴルフツーリズムコンベンション
・広域観光周遊促進事業
・さっぽろ連携中枢都市圏観光協議会

◆ 観光における広域的な連県の推進

北広島市総合計画（第６次）

観光振興の基本的方針として、「北広島の地域特性を生かした都市型観光を推進するとともに、市民、来訪者に多様な楽しみを提供していくために、近隣自治体等と連携した取り組みを進める」ことを掲げるとともに、施策の一つに「観光コンテンツの創造とプロモーションの推進」を位置付けています。

◇ 観光の現状（北海道ゴルフツーリズムコンベンション）

ゴルフ場利用者

・ＪＲ北広島駅は、札幌と新千歳空港駅のほぼ中央に位置し、快速電車で札幌市まで１６分で到着し、新千歳空港駅まで約２０分で到着する。また、東京・羽田空港から1時間50分、関西空港から2時間10分で新千歳空港駅に到着する地の利を活用。
・北広島市内に8つのゴルフ場があり、ゴルフ銀座と紹介していた時代もあった。

◇ 観光の現状（広域観光周遊促進事業）

＜連携手法・R4＞

● 事業主体　北海道観光振興機構
● 地域連携　自治体：札幌市、千歳市、北広島市、北海道石狩振興局

＜事業実績＞

● 事業名　　冬の体験型コンテンツ＋都市型観光を組み合わせた観光コンテンツの磨き上げ

- 事業目的　地域消費の向上のため滞在型好転つの造成、地域の強みである都市型観光と組み合わせ延泊を狙う、冬季の体験型コンテンツの造成により石狩地域が通年を通して楽しめる土台づくり
- ターゲット　中国、台湾、タイ、香港、シンガポール
- 事業内容
  ① 体験型コンテンツ造成事業　旅行商品の造成、検討会の開催、モニターツアーの実施
  ② 旅行商品流通環境整備事業　旅行会社の招聘、ファムトリップの実施、OTAの造成・販売
- 実績
  - 滞在型コンテンツ及び造成数　16件（ツアー3型、コンテンツ13件）
  - 滞在型コンテンツ及び販売数　38件）

◇ 観光の現状（広域観光周遊促進事業）

・さっぽろ連携中枢都市圏観光協議会

＜行政調査の感想＞

鉄道や高速道路などの整備された交通網など自然と都市機能が調和した街でした。そのため、北広島市内に8つのゴルフ場があり、ゴルフ場利用者が多く、観光の主体を担っており、ゴルフ場からの収入が２億円もあり、市の財政に大きく寄与しているし、市内に大規模なアウトレットがあり、また、エスコンフィールド野球場もできたため、市内外からの客が訪れていた。。

北広島市の「観光における広域的な連携の推進」の取り組みは、大都市札幌に隣接し、札幌圏域約230万人を抱える地域の都市として、一年を通して国内外から多くの観光客を迎え、様々な取り組みを行っているが、札幌圏域の街として、協議会などへの負担金が20～３０万円と少ない額になっていたし、積雪のない季節は、ゴルフ場利用者が多く、観光の主体を担っているが、冬季の観光が今後の課題と感じた。

十和田市議会観光建設常任委員会　行政視察報告書

笹渕　峰尚

視察日　　：令和 5 年 7 月 12 日（水）

視察場所　：北海道帯広市

人口　　：約 16.4 万人

面積　　：619.34k ㎡

視察項目　：フードバレーとかちについて

概要　：　十勝とは「トカプチ」管内を流れる十勝川をさすアイヌ語で、「十勝」という地名の語源といわれており帯広市を中心とする 19 市町村で構成され人口約 34 万人の地域です。フードバレーとかちは十勝が持つ「価値」を再認識し、「食」と「農林漁業」を柱とした経済活動を行うための旗印として掲げ、オール十勝で地域の活性化を目指す取組がおよそ 12 年前から推進されております。

方針　：フードバレーとかちで、アジアの拠点を目指す。

十勝の優位性を活かすための方向性として、三つの展開方策で進めます。

・「農林漁業を成長産業にする」

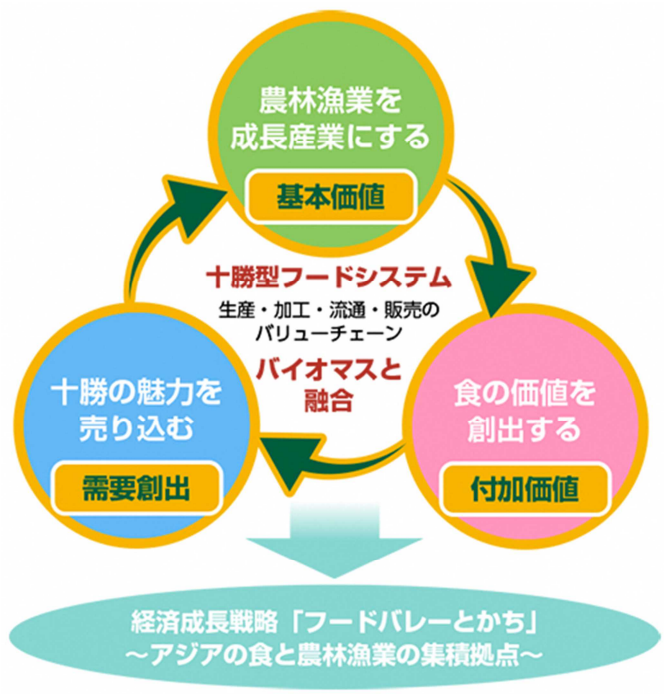
良質堆肥の製造、堆肥活用による土づくりや土壌分析に基づく適正な施肥管理を促進するとともに、十勝型のＧＡＰの導入の促進により、安全安心で良質な農畜産物の生産を推進。」

・「食の価値を創出する」

原材料の研究拠点に加え、加工を通じた付加価値の高い生産拠点において成長していくため、食の安全性向上や魅力ある食品開発、ブランド力の向上などを推進。

・「十勝の魅力を売り込む」

十勝の物産の販路拡大や観光の魅力を発信し、国内、海外においてイベントへの出展や観光物産セミナーを開催。



所感：雄大な十勝平野の地の利を活用するためフードバレーとかちは広域連携や官民連携を推進し国内外に向けての産業振興と地域活性化を目指す壮大な構想でした。十勝の面積は 10.830 km² で青森県の面積 9.646 km² とほぼ同等といえます。

フードバレーとかち構想を青森県に導入することはできないだろうか。例えば十和田市が中心となり本県の農畜水産・林業や観光振興を推進することができたら十和田市のみならず青森県の産業振興の進歩発展になるのではないかと考えました。

現在、当市の広域連携は上十三・十和田湖広域定住自立圏構想が推進され

10 年ほど経過しております。時代の変化とともに見直しは行われておりますが、これからはこの枠を超えた産業又は分野ごとでの広域連携も考えていく必要があります。少子高齢化で人口が減少する中で生産性を上げていくにはフードバレーとかちの取り組みを学び取り入れていくべきと思います。今後も調査研究を進め当市の発展に繋げて行きたいと考えております。

視察日　　：令和 5 年 7 月 13 日（木）

視察場所　：北海道北広島市

人口　　：約 5.8 万人

面積　　：119.05k ㎡

視察項目　：観光における広域的な連携の推進について

概要　：

①　ＨＧＴＣ（北海道ゴルフツーリズムコンベンション）

・北海道運輸局、札幌市、千歳市、苫小牧市、北広島市、北海道ゴルフ観光協会で構成。

・道内のゴルフ場を観光資源に視察や商談会を開催。

（平成 30 年度は北広島市がホスト自治体）

・令和 4 年度は、アジアや欧米豪等、ターゲットとする国の旅行事業者やメディア等の招聘を予定。

②　広域観光周遊促進事業

・北海道石狩振興局、札幌市、千歳市、恵庭市、北広島市で構成。

・石狩地域での誘客を目的とした魅力発信事業の推進。

・令和４年度は、冬の体験型コンテンツの磨き上げと旅行商品の造成、石狩地域で通年での体験型観光を楽しめる基盤づくり。都市型観光と食を組み合わせたアジアをターゲットとした取組。

③ さっぽろ連携中枢都市圏観光協議会

・札幌市と近隣 11 市町村で構成。

・ＷＥＢサイト「くるくるさっぽろ」の運営、モデルコースの紹介、プロモーション（台湾と香港）

方針　：

① 市民力を活かした観光推進力づくり

② 観光資源の保全と有効活用

③ 魅力ある観光基盤の構築

④ 効果的な情報発信

所感：北広島市は十和田市の人口とほぼ同等の自治体で北海道日本ハムファイターズの新球場である北海道ボールパークＦビレッジが令和５年３月に開業したこともあり駅周辺からの賑わいは予想以上でした。

訪日外国人客は収容のキャパシティーを超えている状況にあるとのことでし

た。十和田市においても集客力の高い施設ができると訪日外国人客や交流人口の増加が見込めますが現状は既存の施設を活かす取り組みを考える必要があります。十和田市にはゴルフ施設が２ヶ所あります。北広島市のＨＧＴＣをモデルケースとしてゴルフ場を有する近隣市町村のゴルフ場とＤＭＯなどが連携しゴルフツーリズムを推進し外国人のゴルファーを受け入れる取り組みを推進することにより更なるインバンド需要の増加と経済効果が期待できると思います。関係機関から意見を聞き当市におけるインバンド需要の促進と課題について今後も調査研究を進めていきたいと考えております。

観光建設常任委員会視察報告書

委員　山田洋子

■日　　程：7月11日
　場　　所：帯広市役所
　視察内容：「フードバレーとかち」について

フードバレーとかちは、1市16町2村の自治体で構成され、帯広市が主管している。オランダのフードバレー、アメリカのシリコンバレーが名前の由来であり、「農業・食」の集積地を形成する取り組みである。
この十勝19市町村が、連携し協力をし、その中で役割分担をするなど、地域の強みを最大限に生かした連携を目的としている。
この連携は農業分野だけではなく、十勝定住自立圏の形成、北海道フード特区に指定、国際戦略総合特区に指定され、十勝バイオマス産業都市の認定、十勝・イノベーション・エコシステム推進事業など、各分野において連携がなされている。
このフードバレー構想を進めたのは、2010年に新しく帯広市長になった米沢市長である。当市でも定住自立圏の連携を行っているが、各自治体の連携には配慮も必要であり難しい局面も多いが、十勝でも同じように大変だったという話を伺った。まずは、帯広市と1つの町で連携を締結し、次に近隣の村と連携する、1つ1つの自治体と帯広市が連携をとる形で進められた。そのため、強制的なところがない緩やかな連携で結ばれ、現在の19市町村の形が出来上がったという。
緩やかであるため、企業や研究機関との連携は各市町村が独自に進めていた。これは、帯広市が中心となって形作られたフードバレーではなく、フードバレーの各自治体の取り組みがフードバレーの価値を上げる連携であると感じた。各自治体が協力金を出し合い、その金額によって発言力が左右されるという、自治体同士の連携で見られるような構造がなかった。

この十勝は、小麦、馬鈴薯、生乳、てん菜、小豆、肉用牛と多岐にわたり、全国トップクラスの生産量がある、農業大国である。また無人トラクターなど先進農業を推進し、人手不足解消を行い、高収益化が成功していた。
十勝という地域の名前がブランドになることで、農作物や加工製品や畜産などで高付加価値化をはかる仕組みも、構築されていた。

人材育成にも力を入れ始め、若手経営者を増やす取り組みが行われていると

ころも勉強になった。地域金融機関、自治体、シンクタンク等が主催し、アイディアがある若者が多数集まる場を作り、全国で面白い事業をしている人から話を聞き、若者と意見を言い合う、会議では生み出されないアットホームなカフェのような場所での取り組みであった。アイディアが荒く利益を生み出せるレベルにないものを、ブラッシュアップさせ、事業創生につなげる取り組みは、ハイレベルであり、実際に事業化できるものは少ないが、着実に成功するようにバックアップを受けられるようにしていた。プログラム8年間で、参加者は572名、構想は64件、事業化は20件であった。
これらフードバレーの推進により、人口減少率は自然減程度に抑えられ、税収入の大幅増につながっている。
今後の目標も、十勝への可能性を求め人や企業が行き交う、アジアを視野に入れた食と農業の物流拠点である。

今回の視察では、当市の強みである農業や観光という分野における、広域での取り組みの重要さと、強みをさらに強くするために投資を行う、人手不足解消のために投資を行う、さまざまな問題に1つ1つ取り組むことなど、現状では困難だと感じることを少しづつ解消しているところが勉強になった。目標を明確に持ち率先して行う牽引役については、今後の課題であると感じた。

■日　　程：7月12日
　場　　所：北広島市役所
　視察内容：観光における広域的な連携の推進について

北広島市は札幌市と新千歳空港の中間に位置し、JR快速だと札幌まで16分、新千歳空港まで20分の場所にある。観光立地としては良い場所があるが、アクセスが良いため通過地となり、宿泊や滞在する場所となっていないため、広域的な連携を模索していた。

三井アウトレットパーク札幌北広島があり、コストコホールセールがあり、プロのトーナメントが開催されるゴルフ場を含め8つのゴルフ場があり、新しくプロ野球球団の本拠地となっている。このような他地域にはない立地でありながら、商業地域の衰退、人口減少、コロナの影響で外国人観光客の減少、滞在エリアとしてのコンテンツ不足などが課題であった。

広域観光周遊促進事業は、海外観光客を対象にしたもので、体験型のコンテン

ツ造成、海外旅行会社への旅行商品流通環境整備事業を目的としている。
現状は、効果的なプロモーション模索しているが、他地域に比べ観光資源が不足しており、札幌市に隣接している交通アクセスの利便性を生かしたコンテンツ造営を目指している。
広域的な取り組みとして、北海道ゴルフ旅を企画している。国のビジット・ジャパン地方連携事業を活用して、商談会を行った。参加したのはシンガポール、タイ、インドネシア、オーストラリア、フィリピン、韓国の旅行会社 11 社になる大規模なものである。この事業成果は、大変好評であり、ゴルフに対する海外バイヤーの意向把握になり、3 社が実際にパッケージ販売されている。

ただし、北広島市に滞在する体験型のコンテンツは、BBQ や冬キャンプなどは平均的な評価となり、課題もあるという話であった。

広域連携から近隣自治体との連携を含めた今後の展望なども伺って、当市の共通する悩みも多くあると感じた。
まず、民間事業者の取り組みが観光資源としてブラッシュアップするところが多く、すぐに観光のエースとなる商品が不足していること。
また地域の人材を生かすような取り組みが少なかったことも共通部分として感じた。観光において人材や商品に予算を割いていないため、選ばれる観光地としての底上げであったり、商品のブラッシュアップであったりという部分が足りていないというお話であった。予算をかけて先進的な取り組みなどの勉強会を開いている帯広市の取り組みは、当市でも取り入れることで、通過型観光地から滞在型観光地になっていくのではないかと考えた。

観光地だけではなく、魅力ある地域となることで集まる人材も、そこに残って頑張ろうとする若者も増えてくる、そこを大事にしている地域が今後も選ばれるのではないか、そのために当市でも何が出来るのか、予算や計画の選択と集中ということを主眼に、今後に生かしていければと考えている。

北海道帯広市
フードバレーとかちへ

上空から見える雄大な十勝。
事務局から通された机のテーブルには、さすが牛乳で迎えられほっとした。十勝の農業について、フードバレーとかちの自信に満ちた事務局担当者は、帯広市　経済部　経済企画課のなんとふるさとを離れた十和田からの青年でした。それもその担当者の親御さんは私の知り合いの方でした。

1市16町2村の自治体のなかで、面積と言い、人口といい十和田市を大きく離すところでした。北海道は、広いというイメージはありましたが、広さだけでなくフードバレーというタイトルのごとく、農業が進んでいるところ全国トップクラスの生産量をはじめ、大好きなジャガイモ、さらにあんこが好きな私に取ってどれほど近しいか。その中でも一番驚いたのは食料自給率のダントツなこと。食料自給率を上げることができずにいるこの日本。

フードバレーとかちの由来も、認識のないまま足を踏み入れましたが、すごい・元気さをビンビン肌で感じる街づくりの成功感、自信感にみなぎってました。

市長にはあうことはありませんでしたが、帯広市長が、フードバレーの生みの親、米沢典久さん。
全ての広がりがあるフードバレーとかち。そこで働く人たち、暮らす人たちの生き生きとした顔が浮かんできます。元気いっぱいのとかち。ここまでオールマイティー なとかち。
必ず豊かな生活が保障されているのでしょう。広大な面積とともにそこで暮らすたくさんの顔が、生き生きとしてるのでしょう。大地から吸収される地域の強味、なんといっても「農業・食の成長産業化」「新産業創出・食の高付加価値化」「十勝の魅力発信」の3つを取り組みの柱に、2010年からの展開がされ「フードバレーとかち」のコンセプトとなって成長し続けるとかち。農業が機関産業だけでなく、それに基づいた新たな産業、さらに既に国内だけでなく世界へと発信続け展開している姿。
さらにどこの自治体でも悩みの人口減少率の低さもなく、主要都市の中では札幌に次ぐ低さ。この一点を捉えるだけでは言い切れないものが有るだろうけど、その自治体で暮らす人たちの笑う顔が見えてきます。お話を聞いてわくわくする自治体。短い時間のなかでの吸収でしかなかったが、幸せな顔が見えてくる。勿論そこでの様々な悩み、努力も人一倍にも二倍にでも頑張っているのでしょうが、それを推進するフードバレーとかち推進協議会の取り組みが、後押しし、うまくいったのでしょう。広大な大地が醸し出すあらゆる仕事がつくりだされたまちとかち、私たちが、今回が初めてでなかった視察先であったことも十分にうなづけました。十和田の発信できる魅力は何処に、何かをもち続けていきたい。そこで生活する市民の顔が生き生きと輝く街にしたい、そんなことを思いながら、何を進めたらいいのか、全体が変わることができるのか。ひとつ一つ挑戦しながら元気なまちへ進んでいきたい、また学んでいきたいと思いました。

日本共産党　小笠原良子

大志をいだくまち
北広島市

あまりなじみのなかった北広島市。しかし北広島市は、原爆が投下された広島から、明治17年に広島県人25戸103人が一村創建を目指して原始の森に開拓の鍬を入れ、今日の基礎が築かれたことから始まった町とのこと。そしてあの名言、クラーク博士の、Boys,be ambitious (青年よ、大志をいだけ）を残し、学生たちと分かれた地でもあるということに、またまた驚きました。そして今年（2023年）3月に開業した北海道ボールパークとして、大きく花開く街に。

冷涼な気候の土地ではコメ作りも難しかったでしょうが、十和田においても藤坂5号という冷害に強いコメをつくったという歴史もあり、ここから引き継がれた北海道民のコメが、「北海道遺産」として赤毛米が選ばれたということ、十和田での保存や継承も活用されたなら今頃「遺産」になってたのかな。

北広島というだけあって、ロビーには平和へのモニュメントが、展示され素敵な街だなと感じました。

観光基本計画策定の趣旨を開いてみると、平成30年に、きたひろしま総合運動公園予定地が北海道日本ハムファイターズの新球場の建設地として、決定されたことでの大きな変化。この北広島では観光振興に特化した個別計画を有しておらず、今まで推進のために努力されても思うように行ってなかったらしい。

北広島の施策を見ると、今まではそんなに積極的ではなかったような、印象ですが積み重ねてきた様々な施策がうまい具合に進んだ街ではないでしょうか。一見地味そうに写る北広島。今そこにある観光が目の前に来ていて、特化したまちではないということに縛られているように感じました。

北広島市の観光状況は、これからの観光を目指すまちづくりにおいて、賑わいを起こさせる十分な材料のあるまちだとおもいます。

観光事業者に、まかせるだけでなくまた訪ねて見たいまちとして、進んでいかれるまちになることでしょう。ボールパークとしての力には大きなものがあります。野球だけでない力が、あの広い北海道で、まちづくりが進められるのを初めて知りました。都市部における観光のあり方、市が有する個性や魅力を今後どう発揮されていくかが、都市型概念をどう、打ち出していけるかに大きなウエイトがあるように感じました。個人的には先ず野球の試合があり、それを見に来る全国からのファンがあり、うらやましいなと。これから広く深く広がれる、まちになること間違いないでしょう。そこで暮らす市民の情熱で後戻りのない北広島。

「赤毛米」に見られるような、歴史と文化を大事にする北広島。私たちも大志をいだきながら、市の発展をねがいます。市民と観光客が幸せ感を十分に感じるまちへ今後大きく羽ばたいていくことのなりそうなまちになります。本当にFビレッジの開業を進めていくのですから、地元に住む方々の幸せ感が満杯になりますように。

日本共産党　小笠原　良子

観光建設常任委員会視察研修報告書

江渡信貴

北広島市「観光における広域的な連携の推進」について

〇北広島市の概要

札幌市と新千歳空港の間に広がるなだらかな丘陵地帯にあり、豊かに息づく緑の環境、ゆとりの土地空間、整備された交通網など自然と都市機能が調和した街です。

・人口：５７，５６６人

・世帯数：28，091 世帯

・面積：119，05 平方キロメートル

（令和４年３月３１日現在）

〇取り組みに至った経緯

北広島市総合計画（第６次）の中に観光振興の基本的方向として「本誌の地域特性を生かした都市型観光を推進するとともに、市民、来訪者に多様な楽しみを提供していくために、近隣自治体と連携した取り組みを進める」ことを掲げ、近隣市町村や関係機関と広域的に連携した観光コンテンツを創造し、効果的なプロモーションを展開する

ことになりました。

その中で問題の背景として

① 観光に対するイメージが低い

② 市で完結できる観光資源が少ない

③ 札幌市に隣接する優位性、交通アクセツの利便性、スケールメリット

など問題や利点が見えてきたそうです。

そこから広域連携の重点項目 HGTC、広域観光周遊、連携中枢都市圏の三点が上がってきました。

・HGTC（北海道ゴルフツーリズムコンベンション）

北海道運輸局、札幌市、千歳市、苫小牧市、北海道ゴルフ観光協会で構成。道内のゴルフ場を観光資源に視察や商談会を開催。令和 4 年度は、アジアや欧米豪等、ターゲットとする国の旅行事業者やメディア等の連携を予定しているそうです。

・広域観光周遊

北海道石狩振興局、札幌市、千歳市、恵庭市、北広島市で構成。石狩

地域での誘客を目的とした魅力発信事業の推進。令和４年度は、冬の体験型コンテンツの磨き上げと旅行商品の造成、石狩地域で通年での体験型観光を楽しめる基盤づくり。都市型観光と食を組み合わせたアジアをターゲットとした取り組みを行いました。

・連携中枢都市圏

札幌市と近隣 11 市町村で構成され、WEB サイト「くるくるさっぽろ」の運営やモデルコースの紹介、プロモーション（台湾と香港）を開催したとのこと。

十和田市では 12 市町村と上十三・十和田湖広域定住自立圏第３次共生ビジョンを令和２年２月 16 日に策定しました。広域的な観光情報の発信や周遊観光の促進につながる施策を実施する。とあり目標値は 8，300，000 人となってますが、現状値は 5，307，828 人とまだまだ少ない状況です。

具体的な事業として広域観光振興事業や十和田湖観光誘客事業、特産品の販路拡大事業など行っています。氷瀑ツアー等様々な取り組みがなされていますが、北広島市のような面でとらえる観光施策に

ついては、具体策がまだまだ少ないように感じてました。もう少し戦略的に各市町村の強みを磨き十和田市と掛け合わせ観光客の方々が2倍、4倍と周遊できるような基盤づくり、効果的なプロモーションを行えるようなシステムを構築し、産業振興に力を注いでいかなければならないといけません。市議会議員もDMOともより一層連携し討論していかなければならないと感じました。

「フードバレーとかち」について

○帯広市の概要

北海道東部の十勝地方のほぼ中央に位置する、人口 17 万人のまちです。市域の約 6 割を占める中央部・北東部の平地は、その約半分が農地であり、全国でも有数の大規模経営の畑作・酪農地帯です。

・人口：162，852 人

・世帯数：90、301 件

・面積：618，94 平方キロメートル

○取り組みに至った経緯

帯広・十勝は、日本において有数の食糧生産基地として、大規模な農業が営まれています。農業に関連する大学、試験研究機関、企業が多く集積し、先進的な研究が進められており、農畜産物や加工品が多数あります。「職と農業」を柱とした地域産業政策の考え方を「フードバレーとかち」と総称しまちづくりの旗印としてとかち全域とスクラムを組んで進め、

まちづくり全体に展開しながら国内外へ地域の魅力を展開していくこととした様です。

・十勝の優位性として

自然環境、食・農業関連産業、大学や研究機関の集積が上げられました。

そこから取り組みの柱として①農林漁業を成長産業にする。②十勝の魅力を売り込む。③食の価値を創出する。

地域の強みである農業を成長させそれを基盤とした新たな産業を創出しとかちから世界に向けて価値を発信することが目的だそうです。

・主な成果として

①農林漁業を成長産業にする

◆国際戦略総合特区の制度支援による 設備投資の誘発額 約580億円 ◆十勝バイオマス産業都市構想による 設備投資の誘発額 約216億円 ◆十勝管内農協取扱高 H22年 2,380億円 ⇒ R3年 3,735億円 ◆食料自給率 H25年 1,100% ⇒ R3年 1,339% ◆畜産公社十勝工場輸出実績 H25年 0.6ﾄﾝ ⇒ R3年 283.4ﾄﾝ

今後の取り組みとしては

・持続可能な農業の構築 （環境への配慮、耕畜連携） ・スマート農業の振興 （ICT技術

活用による省力・効率化）　・稼ぐ農業　（農畜水産物の高付加価値化）　・国際競争力の強化　・新たな知見の導入　（大学・試験研究機関、企業間連携）　・災害に強い農業　（気象変動に対応した生産基盤）

②十勝の魅力を売り込む。

◆北海道ＨＡＣＣＰ導入企業件数 R4 年 60 件（十勝累計）　◆新製品・新技術等の事業化・商品化率 H23 年 63.5% ⇒ R3 年 66.4%　◆とかち財団の食品加工の相談件数 H23 年 297 件 ⇒ R3 年 629 件　◆立地企業件数 R3 年 66 件（累計）　◆食料品製造業の従業員一人当たり 付加価値額 H22 年 843 万円 ⇒ R2 年 1,264 万円　◆とかち・イノベーション・プログラム 参加者数 572 名（H27～R4 累計）　◆フードバレーとかち人材育成事業 修了者数（累計） H24 年 47 人 ⇒ R3 年 572 人　◆十勝管内の新設会社数 H24 年 149 社 ⇒ R3 年 245 社

今後の取り組みとしては
・ものづくりのレベルアップ　（市場トレンドへの柔軟な対応）　・物流の改善　（少量多種混載、大都市圏への 迅速な発送）　・起業家・経営者づくり　（これからの十勝を担う人材の確保）　・新事業・新分野への 挑戦　（事業者の進出支援）　・新たな価値の創出　（加工残さ、未利用資源の活用）　・十勝ブランドの強化　（産官学金連携による総合的な 取組推進）

③食の価値を創出する

◆十勝の観光入込客数 H23 年 約 914 万人 ⇒ R1 年 約 1,026 万人　◆十勝の訪日外国人宿泊者数 H23 年 約 9 万 6 千人 ⇒ R1 年 約 16 万 3 千人　◆とかち帯広空港定期便利用乗降客数 H23 年 約 51 万人 ⇒ R1 年 約 65 万 9 千人　◆原産地証明発行件数 H25 年 51 件 ⇒ R3 年 114 件　◆食育推進サポーター活用実績 H25 年 1 件 80 人 ⇒ R3 年 13 件 785 人

今後の取り組みとしては
・産業、自然を活かした 観光戦略　（食・農業・アウトドアを活かした 観光振興）　・大都市圏での十勝ＰＲ　（事業者マッチング・ハイブランド マーケットへのアプローチ）　・食文化の向上　（日本の食を支える地域としての 責任のある食育）　・地産地消の推進　（十勝産農畜産物の域内消費拡大）　・空港運営委託による 効率的な運用　・「十勝ファン」を活用

した 施策展開だそうです。

産業以外にも取り組み効果として十勝一帯の広域消防体制の確立が整ったそうです。

十和田市でも基本計画では同じようなことが書かれていますが帯広市では、国との連携、道との連携、定住自立圏との連携・役割分担の明確化、産業創出という十勝バイオマス産業都市構想の実現、企業との連携、農産物の高付加価値化、新しい魅力ある仕事づくりに対しての多様なプログラムの実現。長芋にも力を入れ成果を上げてきています。

十和田市は農畜産においてとても力を入れています。しかしながら横断的で柔軟な発想が今以上必要だと痛感しました。まだまだ十和田市は伸びしろがあります。一団体、一自治体ではなく「箸よく盤水を回す」の精神を市民一人ひとりが持つ。もう待ってくれない時代に入ったのだと痛感しました。そのためには市長、副市長、農林畜産課に対し、常任委員会として今以上様々な提案をするべきだという考えに至りました。

行政視察報告書

テーマ　　「フードバレーとかち」

日時　　令和５年７月12日（水）午前９時30分

場所　　北海道帯広市

帯広市は人口16.3万人ではあるが、近隣の16町２村と十勝定住自立圏を形成し、商業人口は30万人を超える商業圏を確立している。十勝ブランドを立ち上げ、「フードバレーとかち」を推進。その事業は

1.北海道フード特区国際戦略総合特区指定

2.十勝バイオマス産業都市認定

3.十勝イノベーション・エコシステム推進事業

等、大変素晴らしいフードバレーとかち構想であると思う。元々スタートは、明治の開墾では米が収穫できず、畑作でスタート。農家は同じ作物を作っていた為連携しやすかったのだろうと思う。また、この農業環境で切り離せないのが、畜産、酪農であり、耕作面積は十和田市の50倍位はあると思う。従って、農業機械の効率も良く、一戸当たりの収入が１０００万円を超えると説明を受けた。うらやましい限りである。

さらに日本の大手製菓メーカー「明治」、日本航空（ＪＡＬ）等、多くの企業が参画し、帯広畜産大学と連携している。ゆえに帯広市長の米沢則寿様は「フードバレーとかち」の生みの親として市民や地域から期待されている思いがした。

我が十和田市とは条件が違いすぎるが、農業の町、畜産の町で比較すれば小規模ではあるが、十和田市版フードバレーを築いて欲しいと思う。

観光建設常任委員会

工藤正廣

行政視察報告書

テーマ　　「観光における広域連携の推進」

日時　　令和５年７月13日（木）午前９時30分

場所　　北海道北広島市

北広島市は札幌市から15分、千歳市からは20分、人口は５万６千人と十和田市と同じ位であり、札幌市のベッドタウンとなっている。特にインバウンド観光客の受け入れに条件が揃っている町である。それは広域連携で国内外からのゴルフ観光客を誘致し、輪厚ゴルフ等８ケ所ゴルフ場があり、ANAプロゴルフトーナメントを開催する全国的、世界的に知名度の高いゴルフ場を有しているからである。また、日本ハムが所有するエスコンフィールド（野球ドーム）があり、それに大手企業が参画し、ボールパークとして子供達が遊べる施設、ホテル、温泉が併設されており市民の憩いの場となっている。うらやましい限りである。その他に広域観光周遊等、D.M.O（北海道観光振興機構）が観光事業に参画、成功している。

十和田市と条件は違うが、十和田湖、奥入瀬渓流、焼山地区の開発、そして現代美術館、日本の道百選等、大手旅行企業を巻き込んだ計画をするべきだと思う。その為にはD.M.O（奥入瀬観光機構）に一歩前進して頂きたいと思うし、十和田市からも積極的な意見を述べるべきだと思う。

観光建設常任委員会　工藤正廣

帯広市の「フードバレーとかち」の報告書

小川 洋平

帯広市では、「食と農林漁業」を柱とした、地域産業政策の考え方を「フードバレーとかち」と総称し、まちづくりの旗印として、十勝全体とスクラムを組んで進め、まちづくり全体に展開しながら国内外へ地域の魅力を発信しています。帯広は、我が国有数の食料生産基地として、大規模な農業が営まれている。

大学や試験研究機関、企業が多く集積し先進的な研究を進められており、農業生産物や加工品は、安全で良質な十勝ブランドとして、消費者に広く受け入れられている。

又、十勝地域として農林・漁業を成長産業にする事、又、食の価値を創出する事、又、十勝地域の魅力を売り込む事で三つの取り組みが連携し、オール十勝を作り上げている、「フードバレーとかち」は、国内ばかりでなくアジア市場にも目を向けながら、国内はもちろんアジアの食と農林・漁業の集積拠点を目指している。

北広島市の観光における、広域的な連携の推進についての報告書

小川　洋平

北広島市は、「きたひろしま！総合運動公園予定地」が、北海道日本ハムファイターズの新球場の建設予定地として決定したことを受け、新たにボールパーク開業に向けた観光まちづくりの推進を重点プロジェクトに位置付ける為、平成３１年３月に改訂した、基本方針として、１．市民力を活かした観光推進づくり、２．観光資源の保全と有効活用、３．魅力ある観光基盤の構築、４．効果的な情報発信を基本として、具体的な取り組みを掲げている。

令和２年度までの取り組みは、観光協会の法人化や、観光推進協議会の設置、グリーンツーリズムとの連携、サイクルツーリズムの展開、近隣自治体との連携等を進める事で、魅力ある観光基盤の構築等の推進を図った令和５年、北海道日本ハムファイターズの新球場を核とした、北海道ボールパークＦビレッジが開業し、道内外から多くの観光客が訪れているボールパークは、北広島の新たな観光資源となり、地域ブランドの価値や魅力の向上、更には観光振興の推進力として大きく寄与している、北海道日本ハムファイターズ球場の設置という外的な要因もありますが、そのチャンスを上手く自治体の施策に取り入れて企業と連携して計画を実現している姿が印象である。